

聖新報

Semanario de S. Paulo
Rua Pisan 11, 472
Caixa Postal, 35 SAURUP
Director & Redactor
ROGERO KOWYAMA
Anno 25\$000
Semestre 15\$000
Trimestre 7\$500
Mez 2\$700
Semana \$600

昭和

祝天長節

五年

天長節

皇室の祝典は菊である。天長節に菊の花が咲いて居る事は、私共日本國民にとつて、自然と一致した天長節の様な気がする。

それは私共が、明治天皇時代に生れ、明治天皇の天長節が、菊の期節の十一月三日であつたから、天長節には、よく菊の花を見た。

一つは斯うした幼少時代からの環境が、私共は菊の花と天長節を結びつける思想を持たせたのかも知れない。

菊は皇室の祝典と云ふ傳統的印象があるは勿論だ。大正天皇の天長節は八月三十日、菊の花がなかつた。

それで私共には、甚だ畏れ入るが、淋しい氣をもたせられて居た。ブラジルでは昭和天皇に入つて、其御誕辰が、菊の花が四ヶ月末であらせらるゝ事になつた。

今日の御誕辰に、私共は皇室の御祝典たる菊の花をかざして万里異境の地から、遙かに故郷の空を仰ぎつゝ、壽ぶままつる事の出来たのは、自然と一致した悠久な天長節と云ふ氣がする。

君が代を唱ふるにも菊の花薫る野に、庭に、室に、大和民族がより合つて菊の花を見つめつゝ、唱ふ、誰れも感慨無量であらう日本國!!

一頃は東洋における、支那の一部島嶼に過ぎないと、世界の大多民族から想はれて居た日本であつた。日本國!!

一頃は、藝伎の國日本!!と、世界遊野郎共の性をそつた國と知られて居た日本であつた。

又一頃は、支那と戦争して勝ち、獨立國となつた様に、莫逆つゝの味がある。明徳梅吉、ロシヤ包囲の柳行李見ない男だ、何んでも前め込めるが、出す時は中は苦茶なのが多い、張りが西洋服でもてる。

と、自分でも知つて居る男だ。鍛上げた小刀だ。切味は美事だ。松下正彦、ブラジル羅漢の名を奉りたい。後藤武夫、詩情の重箱に、マメライダとケーヂオを入れた。後藤武夫、詩情の重箱に、マメライダとケーヂオを入れた。後藤武夫、詩情の重箱に、マメライダとケーヂオを入れた。

▲三浦繁、熊の膽でなく豚の膽だ。併し自分では熊の膽だと思つて居る男だ。▲八田一雄、牛の群を飼ふて、カンナを殺して二十年、凡人で凡でない、凡人でなく、凡人である。

▲渡邊孝、瘦せ地に種かへさるゝ大木見たいな男だ。春が来ても夏が来ても、芽も葉も繁らない大木だ。▲矢野龍、金の入歯みたいな男だ。餘りビカ／＼過ぎるとキザが出てよくない。

▲間崎三三、阿部の責任見たに「大官人は如何云ふらん」出て居る男だ。海外男飛が崇つて居る男だ。▲川原政右衛門、あの男は、報が半分を云つて居る男だ。▲奥田龍仁五郎、沖繩縣人で、あの男が、一般代表して居るんじやないか知ら。

▲翁長助成、黙然として居れば、ふく／＼鳥の如く、喋つて居る時は、蛇蝎をくはれた雄子の如し。▲黒石清作、猫の頭に紙袋をさせた位の愛嬌はあらう。

▲富岡漸、水晶壺が黒水晶を堀り出して、白水晶でないかと、大河端でゴッ／＼洗つて居る男だ。……吾も武士の果てて居る男だ。▲長谷川武、十年コソ／＼としてサラリマン生活、全く新氣をなくした。がコンニヤクの中に軟骨をもつて居る様な男だ。▲齊藤武夫、官僚の胡麻の纏てな男にしてしまつたは、才子が才を頼み過ぎたからだ。今じやタンゴスターの切れかゝつた五、十色光のランパ。あの館でも餘り光らぬ。

▲福川隆然、納まる処におさまつたで、道端の地蔵菩薩同様である。あれに赤い涎かけでもかけてあげたら。▲畑中仙太郎、クワタ殖民地にさく、イべの花、赤いイべでなく、黄ないイべの花でな感じだ。▲原口七郎、携帯用の折鶴見たいた。紙幣でも這入つて居る様な物だ。重要書類でも這入つて居るやうで、這入つて居ない物だ。▲妹尾正雄、牝犬から「ワン」と呼びかけられたら、尻尾を股の間にさかして逃げる様な野良犬。▲濱口光雄、何時も「アムレロ」があるんじやないか知ら。それで云ふ事が、虫の性の様に想はれる。

▲多岐聞鐵輔、或る宿屋の草主曰く、「多岐聞さんモツガアガア云はなくならましたよ」と、聲も髪も綺麗にそつてつんだ柔順な定九郎。

▲佐藤次郎、右を向いて猫と左を向いて狸となり、下を向いて狐となり、上を向いて犬となる。七化けの上手な男だ。▲藤田克己、イグアツツで驚かせた節もあつたが、その折から、飯梅である。梅干になる歳でもないに、飯梅である。

▲鮫島直哉、大工の棟頭として世間に顔が買れて居る。寄附金の出し大關として顔が買れて居る。寄附金とあの男は附き者でなく憑者だ。▲山根寛一、あれで日本に居れば鳥取から、民政の陣笠位には出れる男だ。海外男飛が崇つて居る男だ。▲川原政右衛門、あの男は、報が半分を云つて居る男だ。▲奥田龍仁五郎、沖繩縣人で、あの男が、一般代表して居るんじやないか知ら。

人物月旦

如露鏡

人間を、十四字語の原稿用紙の、僅か四五行内に、評價しやうなんて、俺も大抵な仕事じやないと思つたが、俺も、牛も、豚も、海老も、豆腐も鏡詰になつて居る世の中だ。何処かで代議士を鏡詰にした。其各々の名のレツテルを貼つて居る。乾度旨いものばかりじやない。中には鏡詰のし味が悪くて、レツテルの正味を白なしにして居る様なものも出て居る。後口が悪いと憤慨せずと讀んでもらふよ。

▲水野龍、隠元豆の鏡詰みたい。先づ在伯元老から始める。▲明徳梅吉、ロシヤ包囲の柳行李見ない男だ、何んでも前め込めるが、出す時は中は苦茶なのが多い、張りが西洋服でもてる。

▲安田良一、鏡の役には立たぬ。

奉祝

矢部洋服店

リンス市 矢部 清

奉祝

佐藤徳五郎

ノロエステ線アラサツタービル

奉祝

女子裁縫講習所

伊藤定五郎

奉祝

瀬ノ上商店

奉祝

出利葉羊三

海外興株式會社

伯國支店

奉祝

アニマラス農場

イグアベ植民地

代理部

フォード自動車

スタンダード石油

Parque Anhangabahu, 18
Caixa Postal, 3015

奉祝天長節



姫姫

御柳節より

倉本せい子

電話 二二、一九二二

祝天長節

高橋忠一

リンス市

サンパウロスケチ

花村生

収容所

永い永い航海を了へて船がサントスに着いた時は、不安と焦燥とが一時にこみあげて来てぼんやりとひきつられて行く様な気が早頭から移民列車に乗込んだ。

アルトゲセラーの乗客の進んでおぼろげに休んで進む汽車の内でも之れから開けて行く自分の運命を考へては、いよいよ暗い気持ちになり勝ちの心を引き立て、来た。山を降りた汽車があのカッポイラの中を走ると、牛や馬が線路に沿って散在して居るのを見て想像のブラジらしい気分がやつと湧いて来た。

彼は弱い寂しさを押へかたくして日本を二ヶ月前に出た日を胸の中に呼び起した、もう来る所まで来たのだ。彼は生きて行く外仕方がないぢやないか！

都會の場末らしい驛を通過したときに誰云ふとなくサンパウロと云ふ聲が列車の中へ聞へた。汽車は速力をゆるめて收容所の構内に滑り込んだ。

高い赤煉瓦の塀、冷たい暗い威しのする建物、全体の調子が何となく陰鬱で暗い。保りの人達の顔までが惨忍に見える。氣の悪い彼は急々これだと腹をさめた。

船に揺られて居るやうな気分がまだぬけぬ。嗚呼もすして夕食の鐘が鳴つてぞろ／＼と大きな食堂に流れこんだ。

話に聞いて居つたフェジヨンの

に油めし、マカコンの獻立、一さじ食へば甘ければブラジル料理の中は暗い電燈がついてラジオの音が流れて来た。

眠るとはなしにうとう／＼と明かした一夜の夢は淡い。配膳されて行く耕地の事情がたゞ譯も二月の永い航海の其の間古い友達のやうに語り合つた人達と明日は南と北に別れて、見知らぬ人の中に交はつて通ぜぬ言葉に馴れぬ仕事でこれからは自分達の運命を闘つて行くのかと思へば暗い氣もする、然し日本ではもうこの俺はどうすることも出来なかつたのだ、同じ客方をするにも勝手氣儘に行く所まで行くまでぢやないか、

何に何とかなる日が来れば俺にも芽のふくときが来るだろう。もう日本に居つたときやうに、つまらぬ氣苦勞や變な用務なんかするものか、俺はもう素養貧乏だ、之れ以上に何かがあるか腕一本とすね一本遣る所までやる迄は、恐いものはない。

彼はや、とすねは寂しい、弱い心を引立て、自分と自分の心に勇氣をつけた。

誰かが一度は厄介になつてブラジルの最初の夜を明したあの收容所を私は今五年振りに訪ねた入れては吐き出した幾萬人の夢の痕を辿つて私は五年昔のその夜のカーにもたれて居る。新移民當時の自分の姿が鏡の中に浮き出して来る様だ。

祝 天 長 節

精 米

マ キ ナ

農田源行 福島捨吉

奉 祝 天 長 節

社 團 法人 サントス日本人會

奉 祝

中村鐵工場

中村仁太郎

ノロエステ線アラサツパー町

永田忠雄旅館

奉 祝 賀 數 輝 俊

リンス市

奉 祝 大庵喜八

ノロエステ線アラサツパー町

醫師

祝 天 長 節

城間嘉助

リンス市

祝 天 長 節

本田寫真館

本田安喜

奉 精米精珈

廣木合 同 商 會

リンス市オラポピラク五 電話三

奉

パール キチセ

祝

リンス市

祝 天 長 節

つちや旅館

土谷庄之助

祝 天 長 節

中須彌吉

リンス市

奉 パール

オリエンタル

別府しげ子 リンス公園前

奉 祝

カーザベルメーリヤ

澁谷商會